

# いがとこわか通信 vol.5

～三重とこわか国体をもっと知ろう～



今回は平成 28 年に岩手県で開催された、第 71 回希望郷いわて国体に、軟式野球競技の派遣審判員として参加した、中孝幸さんに国体の魅力を聞きました。

**Q. 国体に参加したときの印象を教えてください。**

(中) いわて国体に参加したときは、全国から 4 人が審判員として選ばれ、開催県チームの試



合に対応しました。

国体は地域の人たちの協力で開催される大会です。地元の人たちのおもてなしが、他県の選手や関係者の心に残ります。

**Q. とこわか国体への思いを教えてください。**

(中) 国体に向けて、施設も充実してくると思います。国体をきっかけに、軟式野球をする人口が増えて、伊賀市から全国大会に出場するチームが増えてほしいと思っています。

**Q. 皆さんへメッセージをお願いします。**

(中) 国体は日本の最高峰の大会です。レベルの高い軟式野球が行われますので、ぜひ観戦しに来てください。

また、国体が成功するように、皆で一致団結して頑張りましょう。

## 伊賀の歴史余話

8

### 伊賀の七口と山菅関門

古くから伊賀地域には、隣接する地域とを結ぶ七つの主要な道路(出入口)があり「伊賀の七口」と呼ばれています。

七口の名称は資料によって異なりますが、上柘植一屋口・阿波椽木口・伊勢地大峠口・島原伊賀山口・西山御斎口・内保一木口・安部田牛舌口などと呼ばれ、人びとの往来や物資の運搬にあたり、伊賀の玄関口として機能していました。

また、伊賀にとって七口は軍事上の要所でもありました。慶長 13(1608)年、伊賀・伊勢両国に国替えとなった藤堂高虎は、険しい山道が続く伊賀の地形を見て、この七口に兵士 50 人ずつを配置すれば、四方を山に囲まれた伊賀国への敵の侵入を防げると述べています。その後、泰平の世が続いたため、



▲山菅関門跡

外敵が侵入してくるような事態はありませんでした。幕末に天誅組の変や鳥羽・伏見の戦いが起こると、七口に緊張が走ります。

幕末動乱の舞台となった京都に通じる伊賀山口では、山菅に関門が設けられ、番兵が常駐しました。藤堂藩が幕末に作製した図面「険分図」を見ると、山菅関門には柵門が描かれ、大砲・小銃の配置などが確認できます。

地元の人びとは通行のたびに番兵の許可を得て、門を開けてもらう必要があり、日常生活に大変困ったと言いつづられています。

この関門がいつ廃止になったのかは不明ですが、明治 20(1887)年の「地誌取調書類」には、明治維新の際に柵門が公売に掛けられ、現在はずかしく旧跡を留めるのみだと記されています。

文化財課歴史資料係

☎ 52・4380 FAX 52・4381



▲険分図 (伊賀市上野図書館所蔵)